

暫く臆斷を避け、更に之を斷定し得べき時を待つべきも、茲には便宜舊唐書の記する所に従ひ、比粟毒の名に依らんとす。

比粟毒の部酋としての在世は、龍朔元年（六六一年）以後永隆元年（六八〇年）に及びしが如く、舊唐書廻紇傳及び冊府元龜繼襲篇には比粟毒の次に「永隆中獨解支、嗣聖（冊府元龜は證聖とせり）中伏帝匄、開元中伏帝難、並（冊府元龜は「皆」とせり）繼爲酋長、皆受都督號、以統蕃州」と記せり、新唐書には其の部酋と成りし時代を記さざれども、然も亦た其の在世を龍朔中に繋けたるに至りては同一なり。

比粟毒に繼げる獨解支の時代は舊唐書及冊府元龜繼襲篇によれば、前に引けるが如く永隆元年（六八〇年）以後嗣聖中（六八四—七〇四年）若しくは證聖中（六九五年）に及べるものなり、新唐書回鶻傳には、明かに年次は記さざれども、其の在世を主として武后の時代に置き、然も其の終を以て開元三年（七一五年）とせり、即ち「比粟死、子獨解支嗣、武后時、突厥默啜方彊、故回紇與契苾・思結・渾三部、度磧徙甘涼間、然唐常取其壯騎、佐赤水軍云……獨解支死子伏帝匄立、明年助唐、攻殺默啜」と記せり、默啜の殺されたるは開元四年の事なれば、伏帝匄の立ちしは其の前年、即ち開元三年にして、從て獨解支の死も亦た此の年に在りたるものと見ざる可らず、此の如く此等の三書は各々獨解支の死没の年を記せども、然も三者皆其の説く所を異にし、何れに適從すべきかを知るに苦しましむ、中に就きて冊府元龜の此の一節の行文の體裁は、全く舊唐書の記する所と同一なれば、既に屢々他の場合にも認めしが如く、必ず前者は後者と同一の史料を其の儘に採りしか、若しくは後者を其の儘に取りしか、何れかの場合に外ならず、恐らく後の場合に屬すべきか、果して然りとすれば、冊府元龜の證聖と記せるは嗣聖の